

学位論文の要旨

氏名 金 関 猛 

1 論文題目

『ウィーン大学生フロイト—精神分析の始点—』

2 論文の要旨

本書は序、第一章～第六章、あとがき、注、フロイトが履修した講義のリスト、参考文献、主な人物の関係図、3つのコラムからなり、全体で287頁である。本書はフロイトがウィーン大学に在学していた7年半に焦点を当て、その間の生理学、動物学の研究、哲学との出会い、様々な師や友人との交流に精神分析の始点を見いだそうとするものである。

序では、ギムナジウム生であったフロイトが医学部を選んだ理由、また、当時の医学研究の潮流について述べた。フロイトは、医者になるために医学部を選んだのではなく、あくまで自然科学者を目指していた。フロイトがウィーン大学で過ごした1873年から81年は、実証主義科学としての医学が確立し、そうした研究が展開され始めた時期であった。フロイトの師となった医学者もそうした厳密な実証主義者であった。第1章ではフロイトがウィーン大学で受講した講義を確認した。医学の専門科目と並んで、フロイトは動物学の講義を熱心に受講していた。これはフロイトがダーウィンの進化論に大きな関心を向けていたためである。また、フランツ・ブレンターノの哲学の講義を受講していた点にも注目した。またこの章では、ウィーン大学におけるユダヤ人学生の立場についても論じた。

第2章では学生時代にフロイトが発表した論文「アンモシーテス（ヤツメウナギの幼生）の後根の起始について」を取り上げた。フロイトはアンモシーテスの脊髄の微細な切片を顕微鏡で観察し、末梢からの刺激を伝える感覚神経がどのように脊髄につながっているのかを明らかにしようとする。それは根気強く丹念な手仕事を持続させる研究であった。そして、この論文の背景には進化論があった。フロイトにとって進化論は観念としてあったのではなく、察によってそれを実証しようとしていたことをこの章で明らかにした。

第3章ではフロイトが生涯にわたって敬愛していた師エルンスト・ブリュッケとその研究所について論じた。ブリュッケはヘルムホルツ学派の一人に教えられる生理学者であり、学界の権威であった。ブリュッケはそれ以前の生氣論を退け、生命体には物理、化学的な力しか作用していないという立場に立つ。フロイトはブリュッケ教授からそうした生理学の精神を徹底的にたたき込まれていた。ブリュッケの講義録には、精神分析の根本につながる見解を見いだすことができる。また、生理学研究所におけるブリュッケの後継者エクスマーの考察は、ヨーゼフ・ブローイアーに受け継がれ、さらにフロイトへと継承される。こうした意味でも、ウィーン大学生理学研究所は精神分析の一つの始点であった。

第4章ではフロイトとブレンターノの関係について論じた。ブレンターノは現象学の祖とされる哲学者である。フロイトはブレンターノの講義を受講するだけでなく、学友パーネトとともに私宅に招かれ、親しく言葉を交わしていた。フロイトはブレンターノについて友人ジルバーシュタイン宛の手紙で多くを語っている。フロイトはブレンターノの論理の明晰性、自然科学を重視する立場に深い

感銘を受ける。また、フロイトは学生時代にブレンターノの推薦もあって、当時、編纂されていたドイツ語版J・S・ミル全集の翻訳にも携わった。こうした哲学的な知見は後年の精神分析の展開の基盤となる。しかし、その反面、ブレンターノの有神論には違和感を感じ、ミルの合理主義的な楽観性には同意できなかった。学生時代のフロイトは哲学に惹かれつつも、一定の距離を保っていた。

【乙】

第5章では、フロイトとニーチェの関係について論じた。学友パーネトは学生時代ニーチェに関心を寄せ、フロイトも加入していたウィーン大学の読書協会でもニーチェについて論じていた。それはまだ一般にはニーチェが知られていなかった時代のことである。フロイトはパーネトを通じてすでに学生時代にニーチェのことを知っていた。そして、大学卒業後ではあるが、パーネトはニースで実際にニーチェと知り合い、そのときの模様をフロイトに書き送る。その手紙は残されていないが、パーネトは婚約者宛の手紙でもニーチェのことを書き送っている。この章では、その手紙に基づいて、ニーチェ、パーネト、フロイトの関わりについて論じた。

第6章はまとめの章である。フロイトは合理性、論理性という基盤をブレンターノやミルと共有していた。しかし、フロイトはミルについて「不条理への感覚」が欠如すると書く（婚約者宛の手紙）。それは、フロイトのブレンターノに対する思いでもあっただろう。それに対し、フロイトは人間の心の不条理に関する洞察をニーチェと共有する。しかし、ニーチェがそうした洞察に基づいてある種の「神学」（精神分析協会でのフロイトの発言）を構想し、人類の救済を志向したのに対し、フロイトは、心の不条理をあくまで合理的に解明しようとする自然科学者の姿勢を貫いた。精神分析はそうした自然科学者の精神から生み出されたのである。

(2019 字)

(注) 2,000 字程度にまとめること。